

## 徳島・高知撮影紀行

事務局長 池田良穂

先週の土曜日。目覚めると真っ青な快晴でした。天気予報では明日も晴れなので、徳島と高知に内航客船の撮影に出かけることにしました。

車で明石海峡大橋を渡って徳島の阿南の南に位置する牟岐町の港に到着。ここから沖合に浮かぶ出羽島まで有限会社手羽島連絡船事業が運航する「大生丸」という小型船が運航されており、昨年代替されたと聞きました。牟岐港に到着すると川沿いの岸壁に真っ白な船体の「大生丸」が停泊していました。船員はいませんでした。出港間近な船内には島の高齢の女性が3人乗っていました。「この「たいせいまる」はいつ新しくなったの?」と聞くと、「「たいせいまる」ではなく「おいけまる」と答えてくれ、「昔の船は木造で焼玉機関だった」と話はかなり昔に飛びました。「おいけ」と読む由来はわからないが、昔から同じ船名だという話でした。島には70人くらいが住んでおり、最近、漁師をやりたいという家族が移住してきた20人くらいは増えたといいます。離島では珍しく過疎化が抑えられた成功事例のようです。連絡船は1日6便の運航で、近くの防波堤の上から出港する「大生丸」を見送りました。

この後、北に車を走らせ阿南市の橘湾に面する答島港に到着。この岸壁は阿南橘駅から徒歩5分ほどのところにあり、読み方は「こたえしまこう」です。ここからは15kmほど沖合の伊島に、有限会社伊島連絡交通事業の高速旅客船「みしま」が1日3往復していますが、この船も筆者にとっては初対面の船でした。19総トンで、航海速度は21ノット。本来「日本の旅客船I」に収録すべき船だった船ですが、完全に抜けていたことに気づきました。航海時間は30分で、常石林業建設カンパニーの建造された船です。



大生丸(おいけまる)



みしま

阿南のホテルに泊まり、翌日曜日の朝、6時に出発して山越えをして高知に向かいました。那珂川に沿う山道を3時間ほどかけて走り、9時過ぎには高知市の浦戸湾に到着しました。浦戸湾の入口には橋がかかっていますが、住民の足として県営フェリー「龍馬」が種崎と長浜の間を朝夕は30分間隔、昼間は1時間間隔で結んでいます。航海時間はわずか5分です。

「龍馬」の姿をカメラに収めてから、浦戸大橋を渡り、海岸線の道路を西に30分ほど走らせて、須崎市の内ノ浦湾に到着しました。この湾には須崎市営渡船「くろしお」が朝夕3便、湾内の集落を繋ぐように就航しています。小学校の児童の登下校の輸送が主な役割らしく日曜・祝日は休みでした。ちょうど日曜だったので、どこかに係船されている渡船の姿を探し回り、ようやく「埋立」という岸壁のそばで係船されている一隻を見つけました。姉妹船がもう1隻いるとのことですが見つかりませんでした。わずか7総トンのかわいらしい小型船です。内ノ浦湾は半島の内側に形成された湾で、さらに湾口には橋も架かっていて、湾のまわりを一周する道路も整備されていますが、リアス式海外に沿ってうねうねと曲がる道路なので小学生の通学には不便なための市営船なのだそうです。



浦戸湾の高知県営渡船「龍馬」



内ノ浦湾の須崎市営渡船「第1くろしお」